

入来町農業祭参加での成果と問題点

池田博文

目 的

入来町における農業祭は農業および林業経営者が地域の消費者と一体となって、農林業の振興をはかるために、毎年開催されている祭りである。農林業に対する生産者の営農意欲と消費者の農業に対する理解を深めることは、車の両輪的な存在として位置付けられる。農産物の自由化の進中で、生産者は地域での知恵と技術を経営に生かし、多様な消費者ニーズに応えうる農畜産物の生産に努めることを模索している。このような状況下で、入来牧場はこれまで以上に地域住民との相互理解や連携を深めることを目的に、今回初めて地元入来町の農業祭に参加した。

方 法

農業祭は1995年11月23日に大宮神社境内と旧国道（328号）沿いを利用して開催された。主催は入来町、さつま川内農業協同組合および入来町農業委員会で、協力団体は町教育委員会、農林業生産組合および担い手農家連絡会など入来牧場を含め14団体であった。輸入自由化や経済不況の中で、各団体がそれぞれのアイデアと技術を生かして生産した農畜産物や手作り食品などが展示即売された。子供たちを中心としたふれあいコーナーも、裏作がなされていない水田を有効に利用して開催された。神社の境内では式典、無形文化財保存会による伝統芸能および参加者による餅つき大会、丸太切り大会など種々のもよおしが計画された。

結果と問題点

境内と旧国道を利用して開催された会場は、悪天候にもかかわらず多くの参加者でにぎわった（第1、2写真）。ふれあいコーナーでは県畜産共進会で最優秀賞を受賞した地元の黒毛和種繁殖雌牛が展示され、牧場の技官としてはこういった牛の飼育方法などについての技術交流ができた（第3写真）。また、入来牧場から説明文を掲示して出品展示したトカラ馬、トカラ山羊、ミニ豚、アヒル、マウス等に子供はもちろん大人の関心も高く、地域住民とこれまで以上に深い交流ができた（第4写真）。農産物の即売コーナーでは、有機農法や低農薬で生産された野菜類（大根、人参、白菜、山芋など）や、手づくり食品（手打ちそば、あくまき）など、現在消費者が求めている新鮮で安く、安心して食べられる食品に高い関心がよせられ、非常に喜ばれていた。精肉コーナーでは牛肉および豚肉が市価の2～3割安で販売され、売れ行きが良く活気を呈していた（第5、6写真）。最近、環境衛生面で汚水の垂れ流しが問題視されていることから、簡易的な浄化槽の展示コーナーに関心が集中していた。

このようなことから、生産者・消費者ともに、無農薬の有機農法、農薬の残留および生活環境問題などに深い関心をもっていることが推察された。また、入来牧場が参加したことに対して、地域の皆さんから大変喜ばれ、今後も地域と共同していくよう励ましを受けた。従って、今回の農業祭への参加をきっかけに、これまで以上に大学牧場が視野を広げ、地域と交流して向上しあうことが重要であると考えられた。

問題点としては、農業祭が日曜、祭日であるため、公共機関の一つである入来牧場としては参加しにくい面もある。しかし、こういった問題点を乗り越えて、地域に参加し、共に盛り上げていく事の重要性を感じた。



第1写真 農業祭会場。



第2写真 境内での神舞奉納風景。



第3写真 県畜産共進会で最優秀賞受賞の繁殖雌牛。



第4写真 ふれあいコーナーの風景。



第5写真 農協婦人部の即売コーナー。



第6写真 野菜部会の即売コーナー。